

親子の愛着について



東北大学 加齢医学研究所
教授 川島 隆太

子ども達が健やかに成長し、社会に出て自由に羽ばたくことができるための力を身に付けるには、親子の愛着関係が最も重要な役割を果たします。

親子の愛着関係によってのみ、子ども達には「緊急避難基地」が形成されます。緊急避難基地とは、親への信頼感を示し、主に精神的に危険を感じた子どもが、安心安全の感覚を得て、心を安定させる役割を果たします。これにより、子ども達は、他者への信頼感を持ち、対人関係を広げ、そのスキルを向上させることができます。

これまでの子ども達の認知発達研究の中で、保育や初等教育現場の観察から、たしかに緊急避難基地を持っていないのではないかとと思われる子ども達の数が増えていると感じています。対人関係スキルが低く、内向性が高く、情緒が不安定な子どもの割合が高まっているように感じられます。

この漠然とした感覚を、確証に変えていったのは、私たちが手掛けてきた幼児を対象とした、親子の生活介入研究でありました。

私の研究室の主要な研究テーマのひとつに、コミュニケーションと脳活動の関係性の解明があります。一連の研究で、親子で共同活動を行っている時の脳活動を計測すると、親子の間に共感の脳反応が生じること、子ども達の脳、特に前頭前野が、驚くほど活発に働くことがわかりました。親からの褒め言葉を聞いた瞬間に、子ども達の前頭前野が特に強く働くことも観察されました。

これらの研究成果をもとに、親子の共同作業を通して、子ども達の認知発達を促すための生活介入研究を開始しました。

文部科学省の補助を受け、仙台市内の私立幼稚園をフィールドとした、親子の「脳トレ遊び」プロジェクトを行いました。子ども達の前頭前野のさまざまな認知機能を刺激する「遊び」を考案し、それを園での保育活動と、家庭での親子活動で行ってもらいました。園での保育活動では、子ども達に脳トレ遊びの楽しさを実感してもらうことを主目的としました。一方、家庭での親子活動では、保護者には子ども達の認知機能発達を促進することの期待をモチベーションとしてもらい、その裏側で、親子が向き合って一緒に時間を過ごす時間を、家庭に意識的につくることを主目的とし

ました。

プロジェクトの説明会では、当時、すでに共働き家庭が主流であったこともあり、毎日の生活で手一杯であるのに、さらに5分、10分と時間を割いて何かを新しくするのは難しいと、否定的な声をたくさん聞くことになりました。

プロジェクトでは、子ども達の認知機能検査と親の育児ストレス検査を、開始前と開始後に行い、くじ引きでプロジェクトに参加しないことになったクラスと成績を比較しました。

その結果、脳トレ遊びをしたクラスの子どものいくつかの認知機能発達がより著明であっただけでなく、親の育児ストレスが有意に低下していました。検査項目を精査すると、普段の子ども達の機嫌が良くなり、他者に慣れにくい傾向、刺激に敏感に反応する傾向が軽減することがわかりました。これは、たった5から10分間の親子活動を家庭で行ったことによって、親子の愛着関係が強化され、子ども達のこころが安定した証拠であると考察しました。

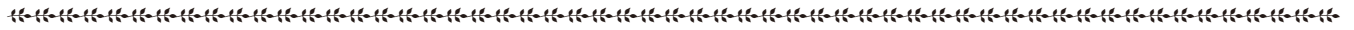
プロジェクト中に、これまで一生懸命、全身全霊で育児をしてきたつもりであったが、親子脳トレ遊びを行って、はじめて我が子とこころとこころが繋がった感覚を得ることができたと言ってくれた保護者の声忘れられません。家庭にあえて外からくさびを打ち込まないと、親子の愛着が十分形成できない社会に我々は生きているのかもしれない。



プロフィール

川島隆太 (かわしま・りゅうた)
昭和34年生れ。千葉県千葉市出身。
東北大学加齢医学研究所 教授。

昭和60年東北大学医学部卒業、平成元年東北大学大学院医学研究科修了、スウェーデン王国カロリンスカ研究所客員研究員、東北大学加齢医学研究所助手、同講師、東北大学未来科学技術共同研究センター教授を経て平成18年より東北大学加齢医学研究所教授。平成26年より令和5年まで東北大学加齢医学研究所所長。主な受賞として、平成20年「情報通信月間」総務大臣表彰、平成21年度科学技術分野の文部科学大臣表彰「科学技術賞」、平成21年度井上春成賞。平成25年河北文化賞。査読付き英文学術論文600編以上、著書に「スマホが学力を破壊する」(集英社新書)「本を読むだけで脳は若返る」(PHP新書)など、400冊以上を出版。



委員長就任のご挨拶

総務委員会
委員長 宮崎 史郷

この度、令和6年度からの任期において、全日本私立幼稚園連合会の総務委員長を拝命しました、宮崎史郷と申します。福岡県から出向させていただいております。地元、(一社)福岡県私立幼稚園振興協会では、副会長を務めております。

就任以前の全日との関わりとしては、全て総務委員会に出向させていただき、三人の委員長の下、副委員長等を務めて参りました。特に、直近での福井前総務委員長の下では、副委員長という役割の中で、不祥事後の全日への信頼回復を第一に考え、組織改革はもちろん、ガバナンスの強化に関する事項を含め、委員長のご指示を頂戴しながら、委員会運営に努めて参りました。

また、同時期に、常任理事として出向させていただいた事で、様々な角度から当時の全日という組織を良い意味で俯瞰する事ができたようにも感じております。

私の総務委員長としての、この度の担いの中心は、当然ながら、ガバナンス強化を意識しながら、組織改革に伴う事項を丁寧に見直し、かつ、必要であれば、速やかに修正・改善していく事が基本軸だと考えています。

また、更には、組織改革の延長線上に、法人化という大きな枠で捉え直す事も並行して検討し、併せて、その具体的な形を描いて参ります。

一方で、組織の在り方も、将来の在るべき全日の姿に合わせて、再調整しなければならないように思います。特に、会議運営の方法やルールについては、これまで、ロバート議事法に則る形で進められておりますが、これまで以上に、誰もが共通認識として持てるだけの最低限のルールを改めて整備し、議案

の上程も含め、会議に参加する全ての皆様の権利がしっかりと担保されるような諸会議等の運営に注力して参る所存です。

また、大切な事として、現状の日々変化する幼稚園・こども園を取り巻く国の動きや環境に迅速・柔軟に対応すべく、即行動可能な組織を目指すのは、必要不可欠な事項であろうと考えます。その意味で、尾上会長が目指す理想の形であるコンパクトな組織となる事も重要な点にならうかと存じます。

何より、会計の予算・執行・管理の面において、会員の皆様から頂戴する大切な会費を無駄なく有効に活用させていただくために、各委員会が展開される事業について、扇の要の役割を果たすべく、横断的に各委員会委員長の皆様方とも相談をし、連携の意識を忘れず、サポートして参ります。

結びになりますが、私は、この全日という組織が大好きです。何故なら、ただ子ども達の成長を願い、日本の未来のため、一心不乱に大好きな幼児教育に邁進される素晴らしい諸先輩方から、多くのご縁や薫陶を頂戴してきたからです。振り返れば、そのどれもがとても有り難く、今の自分を形成している基礎となっていると、心から感謝しております。

まだまだ若輩であり、力不足ではありますが、内野総務担当副会長のご指導の下、事務局の皆様と共にしっかりと連携し、この任期を全うして参ります。

今後とも、各都道府県の団体長様におかれましては、変わらぬ叱咤激励を頂戴したく存じます。併せて、全ての会員の皆様のご理解・ご協力を、心よりお願い申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。